〔研究論文〕

日本語「セクシュアリティ」概念の整理に向けて

椎野　信雄

〔Article〕

Towards Respecification of the Japanese Concept of “Sexuality”

Nobuo　SHIINO

What is sexuality ? It seems that the word sexuality in Japanese cannot be counted as a Japanese vocabulary. Some Japanese dictionaries refer to sexuality as something to do with the sexual. Something means essence, consciousness, physical action, representation, impulse, orientation, interest, capacity, appeal, expression or desire and so on. But what in the world is the sexual ? According to some dictionaries, the sexual means something connected with the state of being male or female, the state connected with sex desire, something connected with both sexes, or something connected with men and women. However, what does do this “sex” mean in the first place ? Common sense in Japanese tells us that sex is “male and female essential”, instinct, lust, or intercourse. If so, what is the difference between the concept sex and the concept sexuality in Japanese ? Is the word sexuality an euphemism for the word sex ? It seems that the concept sexuality is unnecessary in Japanese, and the concept sex will do in Japanese. This paper investigates whether or not it is the case.

１．セクシュアリティとは何か。

セクシュアリティとは何か。「セクシュアリティ」ということばは、まだ日本語（日常言語）の中に入っていないのではないか、という現状認識がある。ちなみに、手元の国語辞典で調べてみると、この「項目」がない辞書も多くあることが分かる。手軽に調べられる辞書において、セクシュアリティの項目があったものは、以下の通りである。

⑴ デジタル大辞泉：セクシュアリティー【sexuality】
《「セクシャリティー」とも》性的特質。性的興味。性を意識させることやもの。
⑵ デジタル広辞苑（第六版）：セクシュアリティー【sexuality】
性に関わる身体的行為や表象の総体。特に性衝動・性的指向性・性的関心・ 性的能力・性的魅力などをさす。性現象。セクシャリティ。
⑶ デジタル明鏡国語辞典：セクシュアリティー【sexuality】
《名》性に関すること。性表現・性能力・性衝動・性的魅力など。
⑷ 三省堂大辞林（第三版）：セクシュアリティー[4]【sexuality】
性行為や性的欲求に関すること。

辞書で意味を調べてみると、セクシュアリティとは、「性的なこと」に関わる「何か」（特質・興味・意識・身体行為・表象・衝動・指向・関心・能力・魅力・表現・欲求など）らしいことは理解

できるだろう。ではそもそも「性的なこと」とは何なのだろうか。日本語で「性的なこと」には、未だ、負のイメージが付与されている場合が多いだろう。淫らなこと、悪いこと、わいせつなこと、いやらしいこと、セックスのこと、エッチなこと、エロチックなこと、エロいこと、いけないこと、恥ずかしいこと、おかしいこと、悩むこと、不安なこと、異常なこと、快感、気持ちいいことなどなどである。しかしこれだけなのだろうか。

辞書的定義によれば、「性的なこと」とは、「男女の性に関するさま」「性欲に関するさま」「男女の両性に関すること」「(男女・雌雄の)性にかかわるさま」のようである。しかしそもそもここに出てくる「性」とは何なのか、性欲の「性」とは何なのかは定かではないのである。したがって「性的なこと」とは何なのかは、結局のところ理解できないのではないか。あえてこの文脈で言えば「男女の本質、セックス、本能、性欲、性交」あたりが現代日本語における「性」の“常識”的な理解なのかもしれない。「性」とはsexと理解しているのが最大公約数なのかもしれない。

以上のような把握においては、日本語に置いて「セクシュアリティ」と「セックス(sex)」には違いがあるのかどうかが不明であるし、「セックス(sex)」の婉曲話法として「セクシュアリティ」が用いられているにすぎないのではないだろうか。セックスとは違うセクシュアリティという言葉がどのように日本語の中に発生しているのかも曖昧なままである。日本語において「セクシュアリティ」という言葉は、特に必要でなく、「セックス」概念だけで事足りるのであり、セックス・性の概念だけで日本語は十分なのだろうか。以下では、このことを検討してみることにする。

2．インターネットにおける「セクシュアリティ」の説明

インターネットで簡単に調べられるセクシュアリティの意味がある。以下では、それらについて検索してみる。

「はてなキーワード」Hatena Keyword
(http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%BB%A5%AF%A5%B7%A5%E3%A5%EA%A5%C6%A5%A3)(閲覧日：2016.4.1. 以下同様。)
セクシャリティ　せくしゃりてぃ　sexuality
性行動の対象の選択や、性に関連する行動・傾向の総称。
広義には、性的嗜好など性的な全ての事象、現象を指すが、最近は狭義に「性的指向」を指すことが多い。例外的に、トランスジェンダー(広義)においては「出生時の生物学的性別と性自認(＋性的指向)」を適宜組み合わせたものが一般的に使われている。

と載っている。さらに、「性的指向」については、

性的指向 [せいてきしこう] Sexual Orientation　性的志向とも(読みは同じ)
(http://d.hatena.ne.jp/keyword/%C0%AD%C5%AA%BB%D8%B8%FE)
　性欲や恋愛の方向を表す概念。性的指向が自分にとっての異性に向けられている場合は異性愛者(ヘテロセクシャル)、自分にとっての同性に向けられている場合は同性愛者(ホモセクシャル)、男女両方に向けられている場合は両性愛者(バイセクシャル)、性別を問わない場合は全性愛者(パンセクシャル)、いかなる性別をも性的対象としない場合は無性愛者(アセクシャル)と表現される。性的指向と性自認は次元の異なる概念であり、性同一性障害者においても性的指向は人によって様々である。
「性的指向」と「性的嗜好」は区別されるべき概念である、という主張もあるが、一方でそれは政治的な分け方に過ぎず根拠は無い、という意見もある。
参考　http://togetter.com/li/436224
関連語：性的指向性、セクシャリティ、ヘテロセクシャル、ホモセクシャル、バイセクシャル、パンセクシャル、Aセクシュアル(アセクシャル)、ノンセクシュアル(ノンセクシャル)、セクシャルマイノリティ

「性」に関する何か（対象、選択、行動、傾向など）であることは、１で見た定義と変わらないが、「性的指向」が狭義の意味として現れ、「性」が恋愛や性欲となり、さらに「性的指向」と「性自認」が異なる概念だとしているが、「性的」が何かは定かではなく、「性」・性欲（恋愛）に関わる何かとされたままである。

Feminist Queer Unit ジェンダー・セクシュアリティ用語解
（https://**feministqueerunit**.wordpress.com/）
セクシュアリティ（Sexuality）
「ヒトがあるモノ・コトを性的と感じている/（場合によっては）感じないという事態そのもの」を指している言葉であり、生物学的あるいは解剖学的な性別、性自認、性的指向、性的嗜好、生殖…などの様々な要素が含意される未定義概念でもある。

未定義概念である指摘があるが、「性的」に関わる何かであることに変わりがない。生物学的性別・性自認・性的指向（性的嗜好）・生殖が区別されている。

性と人権ネットワーク　ESTO　セクシュアリティに関する用語
（**esto**net.info/）
セクシュアリティ（Sexuality）
「人々があるモノ・コトを性的と感じている事態そのもの」を指している言葉です。生物学的な性別、性自認、性的指向、性的嗜好、生殖…などの様々な概念が含まれています。
1999年の世界性科学会議（香港）で採択された「性の権利宣言」は、以下の文章から始まっています。
“Sexuality is an integral part of the personality of every human being.”
（セクシュアリティとは、人間ひとりひとりの人格に不可欠な要素である）

「性的」に関わる言葉であり、様々な概念が含意されている言葉で、「人格」に不可欠なものとなっている。生物学的性別・性自認・性的指向（性的嗜好）・生殖の区別がある。

精神科医杏野丈ホームページ（杏野丈の性同一障害）
（www.harikatsu.com/coramu/1.html）「セクシュアリティの概念」
「セクシュアリティとは、社会や制度や医療などの外的なものによって決定されたり、強要されたり、奪われたりするものではなく、個人に属し、由来し、関係し、個人の人格の一部を構成し、個人の基本的人権の一つとして不可欠なものであるという理念を含有する、個人の性的なことがらを包括的に示す概念である。」

「個人」（の「人格」）に属し、基本的人権の一つであり、「個人の性的な事柄」の包括概念となっている。

ウィキペディアには「セクシュアリティ」の項目はなく、「人間の性」の項目があるだけである。
（https://ja.wikipedia.org/wiki/人間の性）

インターネットで見られる手軽に見られる百科事典に「ニッポニカ」があり、そこには「セクシュアリティ」の項目が載っている。

日本大百科全書（ニッポニカ）小学館　セクシュアリティ　せくしゅありてぃ　sexuality
https://kotobank.jp/word/セクシュアリティ-1554311#E6.97.A5.E6.9C.AC.E5.A4.A7.E7.99.BE.E7.A7.91.E5.85.A8.E6.9B.B8.28.E3.83.8B.E3.83.83.E3.83.9D.E3.83.8B.E3.82.AB.29
狭義の性行為だけでなく、性と欲望にかかわる人間の活動全般を指す語。ただしこの語は「セックス」や「ジェンダー」と複雑に絡

み合っており、厳密な定義は困難である。セックスは生物学レベルの営みを、ジェンダーは文化的性差を指すとされるが、セクシュアリティはそのどちらをも含み、生殖、快楽、恋愛、自己表現といった多様な領域にまたがっている。ミシェル・フーコーは『性の歴史Ⅰ　知への意志』Histoire de la sexualité; La volonté de savoir（1976）において、性が隠されたものであるかのようにみえて、じつは誰もが自らの性を語ることにとりつかれ、それによって自己規定しているという矛盾した事態を指摘した。すなわち性をめぐる言説は、私的領域の中心にありながら高度に公的なものでもある。

一般にこの語が使われるのは「ホモセクシュアリティ」と「ヘテロセクシュアリティ」の区別においてであり、ジェンダーが男女の性差を指すのに対して、セクシュアリティは性的指向、つまり同性愛・異性愛の区別をまず問題にする。しかしこの二分割図式自体、しばしば批判の対象になる。西欧の19世紀末以前には、同性愛行為は存在しても、同性愛者と異性愛者をまったく違うアイデンティティとみなして区別する観念は存在していなかったという認識は、フーコー以来広く共有されるようになっている。ここから導かれるのが、セクシュアリティは生まれつき定まったものではなく、社会的・文化的につくり上げられるという構築（構成）主義の思想である。構築主義は、性の本質は歴史的な変化とは無縁であり、基本的に生物学的に決定されているとする本質主義と対立する。構築主義的視点では、セクシュアリティが個人の深層を決定しアイデンティティの基盤となるという発想自体が、近代権力の働きの一つの表れであり、性科学や医学はこの働きを助長してきたことになる。もっとも性的マイノリティへの差別に反対するには、性指向は生まれつきで本人には責任がないとする本質主義的な議論が有効性をもつことも忘れるべきではない。

セクシュアリティ論の展開にゲイ・レズビアンが多くを担ってきたのは事実だが、同性愛だけがセクシュアリティの問題なのではない。構築主義は異性愛も社会的構築物として見直しを迫ることで、フェミニズムと連動する。また一方で、精神分析や哲学を経由して、性的欲望とはそもそも何かを問う試みも続けられている。政治学においては、個々人の多様な欲望、しかもときにサディスト／マゾヒスト的ですらある欲望を、どのように結び合わせて公共圏をつくり出してゆくかが、重要な課題となっている。［村山敏勝］

『ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ　知への意志』（1986・新潮社）　▽ジェフリー・ウィークス著、上野千鶴子監訳『セクシュアリティ』（1996・河出書房新社）　▽田崎英明著『ジェンダー／セクシュアリティ』（2000・岩波書店）』

［参照項目］フェミニズム フーコー（Michel Foucault）

セクシュアリティとは、「性と欲望に関わる人間活動」であり、「セックス」（生物学レベル）「ジェンダー」（文化的性差）と絡み合った「セクシュアリティ」の領域（生殖、快楽、恋愛、自己表現）とされている。フーコーの「性をめぐる言説」の指摘があり、「ホモセクシュアリティ」と「ヘテロセクシュアリティ」のセクシュアリティ＝性的指向であり、社会的・文化的につくり上げられるという構築（構成）主義の思想の「セクシュアリティ」が紹介され、構築主義・ゲイ・レズビアン・フェミニズムは、異性愛も社会的構築物として見直しており、「性的欲望」が問われているとされているのである。

上記の辞書的定義やインターネットの説明においても記述されていたように、「セクシュアリティ」とは、そもそも日本語和語ではなく、カタカナ語の用法として、外来語・伝来語であるという大前提がある。外来語「セクシュアリティ」は、他国語・外国語・英語起源の語であり、記述されているようにsexualityが原語である。Sexualityの日本語訳が定まらなかったので、「セクシュアリティ」というカタカナ表記が用いられているのである。本稿では、「セクシュアリティ」概念の意味・定義を、原語のsexuality概念の用法に、探究してみる方向を探ってみたいと思う。

例えば、アメリカ心理学会の見解では、「セクシュアリティ＝sexualityの構成要素」が４つにまとめられている。sexual orientation（性的指向）／biological sex（生物学的性）／gender identity（ジェンダー自認）／gender role（ジェンダー役割）である。

http://sugp.wakasato.jp/Material/Medicine/cai/text/subject05/no9/html/section1.html

この辺りの概念区別に、日本語「セクシュアリティ」概念の整理の糸口が見つけられるのではないだろうか。

３．専門用語としてのセクシュアリティ（sexuality）

ここからは、一般の日常用語ではなく、専門用語（術語）としての「セクシュアリティ」の用法をいくつかの事典を例に検討してみることにする。

現代性科学教育事典編纂委員会『現代性科学教育事典』小学館 1995

セクシュアリティ（sexuality）

古い時代では、性（セックス）を性器やそれにかかわる行動のことと考えていた。またそのころには、それぞれの社会体制や機構に根ざした性についての規制があり、性の問題を研究することにも大きな制約があった。

しかし18世紀になると、科学・技術の進歩や産業・経済の発達がもたらした社会の近代化によって、個人の意識や行動に対する社会的規制が弱まり、個人の判断が尊重されるようになった。それに伴って古い時代の性に対する習慣的な考え方やタブーが崩壊し、人間の性行動やそれを支配する条件を解明しようとする性科学や人間関係論が発達した。

その結果、人間の性の多様さや複雑さが次第に究明され、人間の性を、これまでのセックスという概念で限定して捉えることができなくなり、セクシュアリティという概念が生じた。その契機となったのは、1964年のSIECUS（アメリカ性情報・教育評議会）の創設である。SIECUS設立中心メンバーのカーケンダール（Kirkendall,L.A.）やカルデローン（Calderon,M.S.）らは、このセクシュアリティを、性教育における最も重要な概念として提唱している。

カーケンダールは、「セックスとは、身体部分や、それにかかわる行動の総称として考えてきたが、セクシュアリティでは、人間の身体の一部としての性器や性行動の他に、他人との人間的なつながりや愛情、友情、融和感、思いやり、包容力など、およそ人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある生育環境などもすべて含まれる」と述べ（『現代性教育研究』創刊号・日本性教育協会／1972年）、また、ダイアモンド（Diamond,M.）は、「セクシュアリティとは、人間であることの一部である。それは人間であれば誰でも持っている一つの複雑な潜在能力である。その能力は、誰でもある程度は開発する。それがどのような形で、またどの程度まで開発されるかは、各個人の生物学的遺伝資質及び、心理的・社会的経験などの影響を受ける」と述べ、さらに「セクシュアリティとは、人間の感情・思想・行為などの構造体系すべてにかかわるもので、一方で社会に影響を与え、一方で社会からの影響を受けている」ともいっている。（『人間の性とは何か』・小学館／1984年）。

このような複雑なあるいは抽象的ともいえるセクシュアリティの概念を把握するためには、それをいくつかの分野に分けて捉え、さらにそれを総合して全体像を明らかにしていくという試みが必要である。その方法の一つとして、次のような視点がある。

① 生物学的性。

② 社会的性同一性（gender identity）。→ジェンダー・アイデンティティの項参照。

③ 性対象選択。

（田能村　祐麒）

性＝セックス＝sex（＝性器行動）が元であるが、20世紀には人間の性行動の多様性が解明され、セックス＝sex概念からセクシュアリティ＝sexuality概念（人間関係、人間の潜在能力）が生じた。「人間の性」sexuality概念が、60年代、70年代、80年代のアメリカの学会の活動を下に解説され、biological sex／gender identity／sexual orientationの視点が紹介されている。

木田元他編『コンサイス20世紀思想事典（第２版）』三省堂 1997

セクシュアリティ [英] sexuality [仏]sexualite

セックスからエロティシズム（→エロチスム）まで、性愛とその身体表現をめぐる広い領域をさし示すこの語を定義することは難しい。こうした多義性と広領域性のため、現在ではセクシュアリティとカタカナ表記のままで用いられるほうが一般的である。従来は男と女のあいだの性愛を語る際にこの語が用いられたが、同性愛が市民権を要求する動きにしたがって、同性間の性愛についてもセクシュアリティが用いられる。

セクシュアリティについての古典的文献は数少なく、また、フランス文化圏と英米文化圏ではニュアンスを異にする。フランスにおける古典的エロディシズム論としては、禁忌と侵犯をキーワードにしてエロス＊　を語り、女性の美的身体を特権化した近代ロマンティック・ラブ・イデオロギーの典型ともされるバタイユの『エロティシズム』（1951）があり、また、フーコーの『性の歴史』第一巻『知への意志』（1967）は、権力は性欲望を抑圧するのではなく、「秘密」とすることによって駆り立てるという、性愛と権力の関係を逆転させた画期的な作品だが、２巻以降は、性愛という問題が問われる前提としての「養生術」を問題にしてお

り、近代のセクシュアリティの理論には直結しないまま未完に終わっている。彼らとは別に、クリステヴァを代表とするフェミニストたちが女性性を語り起こしているが、ラカンの精神分析にもとづく彼女たちの著作は難解で日本のセクシュアリティの現実分析の武器にはなりにくい。英米圏ではフェミニストを中心に、セクシュアリティの非自然性・文化決定性などを論点に議論が盛んだが、恋愛に始まってセクシュアル・ハラスメントからレイプ、ポルノまで、性愛にまつわる論は現実を後追いするかたちでしか語り起こされてこないのが実情である。（山田登世子）

セクシュアリティ＝sexualityを性愛に関わる領域の包括概念として、20世紀後半の仏英米文化を背景に、フーコー以降、性愛と権力の関係も射程に入れ、紹介している。英米圏のフェミニストたちのセクシュアリティの非自然性論に注目しているが、「性愛」という新たな概念が導入されて議論が進んでしまっている。

廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』岩波書店 1998

セクシュアリティ［英］sexuality［仏］sexualite

「性現象」と訳す。性に関する観念と心理、欲望と志向、習慣と行動の総体。1963年に全米性情報・教育評議会SIECUS（Sex Information and Education Committee of the United States）を設立したカルデローンとカーケンダールは、「セックスは両脚のあいだに、セクシュアリティは両耳のあいだにある」と定義した。この意味で、人間のセクシュアリティは、「本能」や「自然」でなく、集団と文化のなかで学習されるものである。

1976年、M.フーコーが『セクシュアリティの歴史』(1976)を刊行して以来、セクシュアリティ研究のパラダイムは根本的に変化した。性についての探求はそれまで「性科学（sexology）」の対象であり、動物としての人間の性行動を研究する自然科学の一分野であった。最初の統計的な性行動の調査である『人間における男性の性反応』（通称キンゼイ報告）[1948]を刊行し、のちに性調査研究所を設立したアルフレッド・キンゼイも、もともと動物学者であった。だが、フーコーによってセクシュアリティはいっきょに人文・社会科学が対象とする領域に変わった。セクシュアリティには歴史があり、文化と社会によって多様な形態をとると考えられるようになった。1991年からは、国際的な研究誌、『性の歴史』も刊行されている。

近年のセクシュアリティ研究は、性についてのまなざしがいつから性を「自然化」し「本質化」したかを問う。その歴史は18世紀にさかのぼる。セクシュアリティの病理学化と「解剖学的宿命」の発明に貢献したのはフロイトであった（1905）。セクシュアリティの研究にはセックスの脱自然化が不可避的である。

ジェフリー・ウィークスは、セクシュアリティとその本質視がもたらすセクシュアリティの特権化を、近代の産物だとする（1986）。彼は男性同性愛を例にあげて、同性愛の逸脱視と病理学化が18世紀から始まり、その脱病理学化が1970年代に起きたことを論じる。1973年に全米精神病理学会は同性愛を治療を要する「精神病」のリストからはずした。ウィークスの研究によれば性的指向や欲望が人格やアイデンティティに結びつくという見方そのものが近代的なものである。ポスト構造主義フェミニストのジェディス・バトラーは、ジェンダー（性別）がセックスをめぐって定義され、身体が過剰に性化されることそのものが近代の性別秩序のあり方だという（1993）。したがって異性愛中心主義、男根至上主義、再生産中心主義、性の二重基準等々もまた、セクシュアリティの近代の装置というべきなのである。日本においても1980年代以降、セクシュアリティの研究についてのタブーが急速に解け、西欧とは違う日本のセクシュアリティの歴史的研究がすすんでいる。

《文献》上野千鶴子他編『セクシュアリティの社会学』岩波講座・現代社会学10, 岩波書店, 1996; J.Butler, Bodies That Matter, 1993; M.フーコー（渡辺守章訳）『性の歴史』第１巻, 新潮社, 1986; S.フロイト「性欲論三編」『フロイト著作集』5（『性欲論症例研究』）, 人文書院, 1969; A.Kinsey, P.Pommeroy & C.Martine, Sexual Behavior in the Human Male, 1948; J. ウィークス（上野千鶴子監訳）『セクシュアリティ』河出書房新社, 1996.

〔上野千鶴子〕

セクシュアリティ＝sexualityを「性現象」と訳し、60年代のアメリカの学会の動向から人間のセクシュアリティを「本能」「自然」でなく、「集団」「文化」の学習と捉えた。70年代のフーコー以降、セクシュアリティ研究のパラダイムが変わり、自然科学sexologyの対象から人文社会科学（歴史）の対象にセクシュアリティがなった。セクシュアリティの研究とは、70年代のセックスの脱自然化の下、近代におけるsex観の「自然化」（病理学化）・本質化の解明である。性欲や性指向が「人格」や「アイデンティティ」と結びついたのが近代なのである。「セクシュアリティの近代の装置」として、異性愛

中心主義・男根至上主義・再生産中心主義・性の二重基準などがあるのだ。西洋とは違う日本のセクシュアリティ研究が進展しているとしている。

４．80年代90年代のフェミニズムのセクシュアリティ＝sexuality

次にフェミニズム(80年代90年代のアメリカのフェミニズム)における「セクシュアリティ＝sexuality」概念の特徴を検討してみる。

リサ・タトル(渡辺和子監訳)『新版フェミニズム事典』明石書店 1998(旧版1991)
(Lisa Tuttle, *Encyclopedia of Feminism*, 1986.)
sexuality セクシュアリティ

英語のセックスという語は、男や女という性別を意味するセックスと性行為を意味するセックスの両方をさす。性別でいうところの女性に対する抑圧はよく性行為を通して表現されるので、セクシュアリティは当然のことながらフェミニズムの視点からの検証の中で最も重要な課題の一つである。しかし確かに、セクシュアリティに関するフェミニズムの分析は必要であるが、この問題のために現在のフェミニズム運動は分極化してしまった。

ジョアンナ・ラスは、セクシュアリティには二つの面があるとして、これらを「背教徒」と「清教徒」と名づけた。「背教徒」は、性行為(セックス)における急進派で、女性は性的抑圧で苦しんでいると信じ、性革命が女性も男性も解放してくれることを望む。すなわち合意の上の性行為でもそうでないものも、いずれも禁じられるべきだとされることに疑問をもち、性行為の中に特権を認められるものと黙認されるものと禁じられるものがあるという性行為の階層制は、他の階級制度と同様に抑圧的だと考える。一方、「清教徒」は、性解放が、少なくともわれわれの文化で実施されているようなものであれば、男性の特権の延長にすぎず、女性にとっては危険だと考える。そして正常な女性のセクシュアリティは、暴力的で抑圧的な男性の欲望と対照的に、優しく愛に満ちていると信じる。したがって、「背教徒」は性の快楽に中心を置きがちであるが、「清教徒」はその危険に注目する。このように、**家父長制**のもとでは女性にとって、セクシュアリティにはつねに快楽と危険という二つの可能性がある。ときには同じ体験でさえも二つの側面があるので、一つの側面からだけ性(セックス)を見ることは現実に合わないことになる。

性(セックス)はかつて、社会がつくられる前から存在する自然の力であり、しかもつねに社会の構造によって規制されるものとみなされていた。この力が基本的に生活を高揚させてくれるとみなそうとも破壊するとみなそうとも、このような態度はどちらにしても無意識の思いこみのなかにある。しかしフェミニストが、**ジェンダー**は生来のものではなく社会によってつくられたものだとみなしたように、セクシュアリティに関するフェミニズム理論も、性も社会によってつくられるというラディカルな推測で始まった。だが、性はどのようにして、社会のどこでつくられるのであろうか。社会のレベルで、あるいは個人のレベルで意識的に再構築されるのであろうか。ある性行為が他よりも「よりよい」とか「正常」とかいえるのであろうか。性的支配と服従の行為と、世の中の男性支配との関係はどのようになっているのだろうか。あるいは欲望と男女関係との関係とは何なのであろうか。女性のセクシュアリティは男性のものとは根本的に当然異なっているのだろうか。**異性愛**は女性の抑圧とどのように関係づけられるのであろうか。

このような疑問をあげて、女性たちの空想、欲望、体験を調べて、その答えを見つけようとしているフェミニストもいる。また政治的に正しいフェミニストの性行為とはどうあるべきかということを自ら決定してしまっているので、このような疑問を問いかけることさえ怖れるフェミニストもいる。「**個人的なことは政治的である**」というスローガンの意味を誤解すると、それが命令的なものだと取り違えてしまい、自分の性的衝動を政治的な意味に合致するように変革しようとしてできないからといって罪の意識をもつ女性が多くなる。

ゲイル・ルービンによれば、「性行為はその意味を重視されすぎるという重荷を負っている。人々は適切な餌食が何かについては、がまんが足りなかったり、ばかげていたり、自分の好みを押しつけたりすることがあるが、その献立が違うからといって、エロティックな嗜好の違いによくありがちな怒りや不安や恐怖といったものを感じることはめったにない」。(「性を考えるーセクシュアリティの政治学に関するラディカル理論の覚書」[‘Thinking Sex: Note for a Radical Theory of the Politics of Sexuality’,1984])

この例は、1982年のニューヨークのバーナード大学で開催されたフェミニスト会議に抗議するフェミニストの強い巻き返しにみられたのである。第九回学者とフェミニスト会議は次のように呼びかけた。「女性の性的快楽、選択、自律を考えると、セクシュアリティは、抑制、抑圧、危険の領域であると同時に、探索、快楽、活動力の領域に渡っている。この二重の焦点は重要だと考えられる。なぜなら快楽や歓喜のみを語ることは、女性がおかれている家父長性の構造を無視することになるが、しかし性暴力や抑圧のみを語ることは、女性の性的活動や選択の体験を無視し、女性のおかれている性的恐怖や絶望を心ならず増大させることになるからである」(キャロル・ヴァンス『快楽と危険ー女性のセクシュアリティの探求』(*Pleasure and Danger: Exploring Female Sexuality*, 1984)。この会議に対し、「ポルノグラフィに反対する女たち」などのグループが組織した連合体はザップ行動を

行い、「反フェミニスト」の講演者を呼んだとして非難し、参加者個人のモラルの観点から受け入れることができないと攻撃するパンフレットを配布した。

この抗議にみられるように、セクシュアリティは多くのフェミニストにとって、自分の立場を決定する問題となってきた。男性の異性愛は、女性抑圧の根本原因であり、ポルノグラフィや女性に対する暴力行為に最もはっきりと表現されている。したがって、制度上の問題としてだけでなく（寝室でも闘われており、そこでは性欲の個人的な表現の仕方が重要な意味をもってくる。しかし、このようなフェミニストのセクシュアリティの再定義は、解放というよりも新たな境界線を引き、政治的正義のために特権グループをつくっているようにもみえる。さらに欲望はたやすく制御できるものではない。いずれにしろ、どのような性行為ならば受け入れられるのかという点で同意が得られなくとも、現代のフェミニズムは重要な成果をあげている。つまり、これまであまりに長い間、女性のセクシュアリティは男性によって規定されてきたが、いまや女性自身が自らのセクシュアリティに対する自己決定権と決定する力を要求している。＜その後、多様な性指向、性的自由の権利（セクシュアルライツ）を目指すグローバルな運動が広がっている。特に北京『行動綱領』は、それを女性の人権と認めた。＞

⇨レズビアニズム（p.207）、オーガズム（p.274）

英語のsexには「性別」と「性行為」の両方の意味があり、フェミニズムの視点からは、家父長制の下の女性のセクシュアリティには「快楽」（性の解放の支持と、性行為の階層制への抵抗）と「危険」（男権の延長としての性解放と対照的な女性のセクシュアリティ）の二つの可能性があると、指摘されている。社会によってつくられたものとしてジェンダーと同様に、社会によってつくられるセクシュアリティに関するフェミニズム理論では、男性の異性愛（ヘテロセクシュアリティ）と女性抑圧の関係が問われている。政治的に正しいフェミニストのセクシュアリティ概念が、女性たちに両義的な効果を及ぼしている。セクシュアリティは、危険（性暴力、家父長制の構造）の領域であると同時に、快楽（歓喜、選択）の領域に渡っているのである。フェミニズムは、女性の自らのセクシュアリティに対する自己決定権と決定する力を要求しているのである。

マギー・ハム（木本喜美子・高橋準監訳）『フェミニズム理論辞典』明石書店 1999

（Maggie Humm, *The Dictionary of Feminist Theory* 1995）

Sexuality セクシュアリティ

欲望を創造し、組織し、表現し、方向づける社会的プロセス。**フロイト**は女性のセクシュアリティを生まれながらにして受動的でマゾヒスティックかつナルシスティックだとしたが、フェミニズム理論は1960年代から女性の体験の現実を無視したセクシュアリティの通念に対して全面的な批判を開始した。たとえば**アン・コート**は「**膣オーガズムの神話**」で、女性のセクシュアリティは膣への挿入にしばられておらず、多様で拡散しうると論じた[Koedt 1973]。

ジュリエット・ミッチェルの「**女性－最も長き革命**」[Mitchell 1966]において、セクシュアリティは女性抑圧の四つの構造の一つにあげられている。フェミニズム理論は、男性による**生殖**と女性の**身体**のセクシュアリティの**支配**は**家父長制**の主たる営為だと論じる。この意味でフェミニズムでは、セクシュアリティは生得的なものではないが、個人の生活や意識のあり方に影響する政治的・文化的制度を反映しているとされる[Firestone 1970]。

フェミニスト精神分析学者（ドロシー・ディナスティンなど）は、セクシュアリティには、男性が本質的に一夫多妻的であって女性が一夫一婦を好むとみなす二重規範があると論じる。

フェミニスト教育学者は、セクシュアリティが**イデオロギー**と実践で分断されていることから、**教育**の場においては女性の**アイデンティティ**の**葛藤**がみられると論じる。たとえば、少女に対するセクシュアリティの管理と養育者としての育成は、子どもとしての少女たちの位置づけと**矛盾**を来す。少女のセクシュアリティは、母親的な慈しみに変換されていく[Walkerdine 1986]。

ラディカル・フェミニズムによれば、女性の抑圧は男性による女性の受胎能力とセクシュアリティの支配から始まる。ラディカル・フェミニズムは、「あらゆる」セクシュアリティの表現において男性が支配的なのは、究極的に男性たちによる生殖能力支配に根ざしていると論じる[Rich 1980]。

フェミニズム理論のなかでは、女性のセクシュアリティの「本質」について議論が続いている。一部のフェミニストは、女性のセクシュアリティはレズビアン関係のなか以外では真に立ち現われはしないと主張し、他のフェミニストは、そのような「純粋性」を想像するのはセクシュアリティを**権力**の問題から切り離してしまうことになると論じる。レズビアン・**サドマゾヒズム**の擁護者は、セクシュアリティの商品化と闘い、セクシュアリティの**概念**を広げるためにあらゆる性的表現を探索すべきだと論じる[Califia 1981]。しかし、女性の**主体**を社会改革のプロセスのなかに位置づける女性のセクシュアリティの「新たな」形態はまだ存在していない。（清水）

フェミニズム理論は、男性による生殖と女性身体のセクシュアリティの支配が、家父長制の主たる営為だとした。セクシュアリティは、生得的なものではなく、政治的・文化的制度の反映だと捉えたのである。セクシュアリティは、イデオロギーと実践で分断されており、女性のアイデンティティに葛藤（母親と少女）をもたらすものなのである。ラディカル・フェミニズムは、男性による女性の生殖能力とセクシュアリティの支配から、女性の抑圧が始まる、と論じている。フェミニズム理論の中で、女性のセクシュアリティの「本質」について議論されている。セクシュアリティと権力の問題が提起されているのである。

ソニア・アンダマール／テリー・ロヴェル／キャロル・ウォルコウィッツ（奥田暁子・樫村愛子・小松加代子訳）『現代フェミニズム思想辞典』明石書店 2000

（*A Concise Glosssary of Feminist Theory*, 1997）

Sexuality セクシュアリティ

今日、通常の意味でのセクシュアリティの定義は、個人の生物学的な内的衝動ないし拍動は自然なものという定義であるが、これはフロイトのリビドー概念に基づいている。この言葉は、またときには、性的志向とか**アイデンティティ**（「彼女のセクシュアリティ」）を述べるのに用いられている。それは、ふたたび個人の属性として感じ取られることになるのである。しかし、フェミニストの著作の中では、「セクシュアリティ」は、スティーヴィー・ジャクソンやスー・スコットが述べているように、ふつう「エロス的な意味を有する個人的および社会的な生活」に関わるものとされている。すなわち、「個人のエロティックな欲望、実践、アイデンティティ」であるのみならず、いつなんどきでもエロスの可能性を構成する**言説**や社会的取り決めでもある（Jackson and Scott 1996 : 2 ）。エロス的なものとして定義されるものが多様であるとしたら、この言葉で包摂されるものは決して固定されたものではない。ほとんどのフェミニストは、――そして性科学者や社会学者は――いまや「セクシュアルなものの普遍主義的な概念」を否定するにいたっている（Gagnon and Parker 1995 : 8 ）が、それは社会構築主義のある形態のゆえにである。

フェミニストは、個人としての女性や男性の置かれた状況、道徳、選択の問題としてではなく、政治的な問題として――つまり**性の政治学**としてセクシュアリティを理解する。たとえば、その時代における中産階級の白人女性の経済的・法的な依存性やその時代での自律的な女性の性的感情の否定という限定を受けながらも、ヴィクトリア時代の女性たちは、自分たちの利益のために、女性は「情熱を持たないもの」（Cott 1979）という**支配的イデオロギー**を修正させ、このイデオロギーを男性の情欲に対する道徳的力と抵抗の源泉へと変えて、男性にその態度や慣例を改革するように告発したのである。――「女性には投票権を、男性には貞節を」というのが、参政権運動の一つのスローガンであった。彼らは、女性の性的自律の機会を得ようと考えたわけではなかった。しかし、19世紀末には、「新しい女たち」は、女性にとっての性的快楽の可能性を窒息させるような見解や慣例を拒否し始めた（Bland 1986）。

第二波フェミニズムは、女性のセクシュアリティを定義する権利を要求することから始まった。まず手始めに男性との関係において、そして後には「セクシュアリティ」を、その一つの形態である制度化された異性愛と融合することに対して異議を唱えた。著作者たちが批判したのは、男性によって定義された取り決めや慣例や期待であった。それらは、性科学者や心理療法家やポルノ制作に携わる人たちによって増幅されたもの（とりわけ性や性的快楽を「性行為」、すなわち異性愛的性交と同一視したこと）であった。その一方で、女性の真のセクシュアリティを明らかにする可能性をつくり出した（Greer 1971; Hite 1988; Koedt et al. 1974; Jeffreys 1985; Jackson and Scott [eds] 1996; Millet 1971）。ヒラリー・アレン（Allen 1982）が論評しているように、女性の性的**欲望**が柔軟なものであるという自発的な見解を採用している者もいる。たとえば、政治的レズビアン主義を展開させたアドリエンヌ・リッチ（Rich 1980a）たちは、「性愛は生殖器に集約されるのではなく」、「女性の友情全体に広がっている」という、より「深い女性の経験」のゆえに、女性たちが**強制的異性愛**を捨て去るのだと考えた（McIntosh 1993:35）。リッチはそれをレズビアン連続体と命名した。近年、多くの著者が、フェミニストもそうでない人も、人種化された性的イメージの破壊を歓迎するようになってきた（Cranny-Francis 1995; Gilman 1985; Marshall 1994; Stott 1989; Porter and Hall 1995）。だがフェミニストの大半は、性的欲望をジェンダー化された**主体**の位置と不即不離の関係にあるものとみなし続けているのである。

しかしメアリ・マッキントッシュ（McIntosh 1993）とダイアナ・フス（Fuss 1989）が指摘したように、**ラディカル・フェミニスト**が批判したのは、社会的に構築され、男性によって定義づけられた女性のセクシュアリティ概念なのであって、セクシュアリティについての**本質主義的**思考の原理そのものではなかった。フーコーは、さらに強い社会構築主義の立場をとっている。彼の著作は、近年のフェミニスト理論に重要な影響を与えてきた。フーコーにとって、セクシュアリティとは単に「一つの歴史的構成物に与えられた名前」（Foucault 1980b:105）、すなわち言説によって定義された一つの領域にすぎない。つまり、社会的なアイデンティティの中心をなすものとしてのセクシュアリティにわたしたちが今日心を奪われていることは、一つの近代の構築なのだというわけである。

セクシュアリティとは、権力が阻止しようとしている自然的所与の一種として、もしくは知が次第に明るみに出そうとしている不分明な領域として考えてはならない。それは、一つの歴史的構成物に与えられうる名前なのである。すなわちそれは、把握困難な密かな現実ではなくして、身体の刺激、快楽の強化、言説を誘う動機、特殊な知の形成、支配と抵抗の強化といったものが相互に結び合っている、大きな表層的ネットワークなのである……(Foucault 1980b:105- 6)。

フーコーによれば、ヴィクトリア朝時代においては、性は沈黙させられていなかった。やがて性は、「医学や医療の対象」となった。それは、「公共的で有用な言説」を増幅させることを通じて、社会的な統制の中心をなすものとなった。

キャサリン・マッキノン(MacKinnon 1992)が主張するところによれば、セクシュアリティについてのフーコーのジェンダーブラインドな言説史は、男性による女性の性的**抑圧**の歴史全体、すなわち言説として構成できないレイプや[性的]虐待の事実を無視してしまっている。フーコーの全体的な企てには敵対するものではないけれども、ジャクソンとスコットは、同じ要点をより穏やかな表現で主張する。つまりフーコーにおいては、これらの言説が構成する、肉体的あるいは経験的な「それ」は、視野から消えてしまう。しかしながら、セクシュアリティが言説を産出することを強調することで、フェミニストによる新しい言説の解体は、強化されている。たとえば、[性的]虐待をテレビで放映すること(Alcoff and Gray 1993; Bell 1993)や、学問体制や法的統制における熟達した知の役割(Smart 1989; 1995)がそうである。つまり、フェミニストは、性の言説を構築する例として自分たちの著作に向きあわなければならない(Bell 1993)。

女性の性的行為や選択の度合いについての1980年代のフェミニズムの論争(いわゆる「セックス戦争」)は、サド・**マゾヒズム、ポルノグラフィー**、売春をめぐる議論の前面に今なお現れている。**クイア理論**の展開(McIntosh 1993)、とりわけクイア理論による**ジェンダー**とセクシュアリティの分離とともに、異議申し立てがさらに行われるようになった。

セクシュアリティは、個人の属性として性的指向やアイデンティティを述べるのに用いられているが、欲望を構成する言説や社会的取り決めでもあるのだ。フェミニストは、性的なことの普遍主義的概念を否定し、社会構築主義のゆえに、性の政治学としてセクシュアリティを理解している。第二波フェミニズムは、女性のセクシュアリティを定義する権利の要求から始まった。男性によって定義された異性愛に異議を唱えたのである。強制的異性愛に代わる女性の性的欲望を歓迎しているのだ。フーコーは、セクシュアリティの本質主義的思考原理ではなく、社会構築主義の立場を取っている。セクシュアリティは、言説によって定義された一つの領域であり、「アイデンティティの中心をなるものとしてのセクシュアリティ」は、一つの近代の構築なのである。フーコーのジェンダーブライドなセクシュアリティ言説史では、言説で構成できないセクシュアリティの事実が無視されていると批判するフェミニストもいる。フェミニストには、性の言説を構築する自己が問われているのである。ジェンダーとセクシュアリティの分離が議論されている。

『岩波女性学事典』岩波書店 2002

496セクシュアリティ sexuality

性にかかわる欲望と観念の集合。最初日本に紹介されたときは性的欲望と翻訳されたが、のちに性にかかわる現象の総体を示す用語として、“性現象”と呼ばれるようになった。人間の性行動にかかわる心理と欲望、観念と意識、性的嗜好と対象選択、慣習と規範などの集合を指す。アメリカ性情報・教育協議会(SIECUS)の創設者カルデローンとカーケンダールによれば、“セックスは両脚のあいだ(すなわち性器)に、セクシュアリティは両耳のあいだ(すなわち大脳)にある”とされる。したがってセクシュアリティは“自然”と“本能”にではなく、“文化”と“歴史”に属する。

セクシュアリティ研究の歴史　1976年フーコーが『性(セクシュアリティ)の歴史』第1巻(邦訳86年)を書いたことでセクシュアリティ研究は大きく転換した。それまでは、性についての研究は性科学(sexology)と呼ばれ、動物学、医学、産科学、生理学、心理学などの専門家が担い手となり、動物的なレベルにおける人間の性行動を、自然科学の方法で研究する一分野と考えられてきたが、フーコー以後、セクシュアリティは人文社会科学の研究対象となった。性に歴史があるという考え方は、一挙に新しい研究領域を開き、膨大な歴史研究が蓄積された。フーコーは“セクシュアリティの近代の装置”を言説分析によって明らかにし、セクシュアリティの系譜学を打ち立てることで、同性愛の脱病理化を図ったが、ジェンダーに対する関心が不十分であることで、フェミニストから批判を受けた。

性の科学は19世紀にR.v.クラフト＝エビングやエルンスト・ブロッホらによって“変態性欲”論として病理学研究から始まった。

フーコーは、“性の科学(scientia sexualis)”の成立そのものを、性の技巧(ars erotica)と区別して、近代の性をめぐる知の装置だとする。そこではセクシュアリティが人格と結びつき、性を語ることが“真理”をめぐる言説のゲームとなる。

セクシュアリティ研究の嚆矢(こうし)はフロイトである。フロイトは人格の発達を性欲と結びつけることでセクシュアリティを本質化した。フロイト理論は、１)セクシュアリティの人格化、２)ジェンダーの運命視、３)異性愛秩序の自然化、４)同性愛の病理化等によって、その性差別的な性格を批判されている。フロイトを女性の側から読み替える作業については、ヘレーネ・ドイッチュ、メラニー・クラインらの女性精神分析家の試みがあり、ジャネット・セイヤーズらによるフェミニズムの精神分析研究も登場した。92年にはエリザベス・ライト編『フェミニズムと精神分析事典』(邦訳2002年)も刊行されている。

フェミニズムとセクシュアリティ　第二波フェミニズムは、セックスからジェンダーを切り離さなければならなかったように、セックスからセクシュアリティを区別する必要があった。最も早い時期のジュリエット・ミッチェルの『精神分析と女の解放』(1974年、邦訳77年)以来、フロイトの精神分析は批判と読み替えの対象であった。というのはフロイト理論は異性愛秩序のもとでの女性のセクシュアリティの形成を自然化したからである。精神分析はその後、フェミニズム批評に強力な理論的な分析概念を提供するばかりでなく、90年代においてもテレサ・デ・ラウレティやジュディス・バトラーなどジェンダー理論家による再解釈の対象となってきた。

フェミニズムは男性中心的、性器中心的、異性愛中心主義的な近代のセクシュアリティを批判してきた。アドリエンヌ・リッチは女性のセクシュアリティを“レズビアン連続体”と捉え、フランスのイリガライは“ふれあうふたつの唇”の快楽の自律性を主張した。近代の性規範が“正常”とするセクシュアリティは、リッチによれば“強制的異性愛”、ゲイル・ルービンによれば二元的な“セックス／ジェンダー・システム”と呼ばれる異性愛秩序である。男女のあいだの膣・ペニス性交を正常とするセクシュアリティの規範が女性抑圧的であることを指して、異性愛(差別)主義(ヘテロセクシズム)とも呼ぶ。異性愛主義は、１)同性愛恐怖(ホモフォビア)と、２)女性嫌悪(ミソジニー)の組み合わせから成り立っている。すなわち男性同士のホモソーシャルな連帯(これが社会と言われる集団の実体である)を確保するために、男性のあいだのホモエロティックな関係を抑圧し、同時に女性を同等な集団のメンバーから排除し、所有の対象として客体化する。自分に帰属する女性を１人は持つことが男性性のアイデンティティの根拠となり、獲得した女性の数は男性集団のあいだでの覇権主義的な競争の指標と成る。いわゆる“女好き”の男は、その実、女性を客体としか見ない性差別者である。他方、女性から見れば、男性に帰属することは女性の条件となり、男性に選ばれるために他の同性と潜在的な競争状態に置かれる。したがって女性のあいだには、男性のようにホモソーシャルな集団が成立しにくい。E.K.セジウィックやモニク・ウィティッグらは、異性愛主義のこのような男性中心性を明らかにした。

新しいセクシュアリティの動向　セクシュアリティを性器中心的な異性愛主義から離れて、身体のエロス的な多様性と捉える見方が登場している。自律的な身体の快楽として女性のマスターベーションやクリトリス・オーガズムを強調したり、性器接触に還元されない多様な身体のエロス的な可能性を探求する立場もある。男性のように射精で終わらない女性のエロスを、妊娠から出産までの長いプロセスとして捉える立場もある。女性の快楽や性欲を、男性中心的な用語で定義することを拒否する人びともいる。また女性の快楽を肯定して、性差別的な男性用のポルノグラフィー(ポルノはもともとギリシア語で娼婦の意)に対して、女性向けのエロチカを制作しようとする動きもある。異性愛主義から脱した女性のセクシュアリティの探求は、活発化している。

⇨異性愛主義、ジェンダー、フェミニズム

［上野千鶴子］

「性にかかわる欲望と観念の集合」であるセクシュアリティ＝sexualityは、始め「性的欲望」と訳されたが、「性現象」と呼ばれるようにもなった。セックスは「性器」であるが、セクシュアリティは「自然」や「本能」ではなく、「文化」と「歴史」に属するのである。

セクシュアリティ研究は、フーコーによって、sexologyとして自然科学の方法で研究する分野から、人文社会科学の研究に転換した。「性に歴史がある」と考えるフーコーは、「セクシュアリティの近代の装置」を言説分析し、同性愛の脱病理化を図った。フーコーは、性科学(scientia sexualis)の成立を近代の性をめぐる知の装置(「人格」「真理」をめぐる言説)だとしたのである。

第二波フェミニズムは、セックスからジェダーを切り離したように、セックスからセクシュアリティを区別した。フェミニズムは、男性中心・性器中心・異性愛中心主義の近代のセクシュアリティを批判している。異性愛主義(ヘテロセクシズム)は、ホモフォビアとミソジニーから成り立っているのである。異性愛主義・性器接触中心・男性中心から脱した女性のセクシュアリティ(身体のエロチカ)が探求されている。

5．社会学のセクシュアリティ＝sexuality

次に「社会学」のセクシュアリティ概念を見てみる。

日本社会学会社会学事典刊行委員会[編]『社会学事典』丸善株式会社 2010

セクシュアリティ

日本語の「性」や英語の「sex」は、日常的な感覚として、男女の差異を表すとともに、性愛を指し示しているように思われる。セクシュアリティとは、その後者に対して、私たちがどのような意味を込めているかを分析するための概念である。実際には、社会学においてセクシュアリティが定義されて使われることはそう多くないが、一般的には、生物学的な性別であるセックス、性別を社会的なものとして（近年ではセックスも含んで）とらえるジェンダーとならび（p.408「ジェンダー」参照）、それらには還元されないものとして区別されている。還元され得ないというのは、それが性別ではなく、性愛をめぐる欲望や感覚と結び付いているからである。セクシュアリティとは、性愛から派生する観念・行動・社会制度などを分析するための概念なのである。

その一方で、セックスおよびジェンダーとの関連性が模索の焦点ともなっている。誰をどのように欲望するかには、「誰が誰に対して」に関わる部分でセックスと、どのように欲望するか、それによってどう行動するかなどに男女の差異があるとされていることでジェンダーと関わっているからである。

具体的には、恋愛、オナニー、誰を（どのような性別の人を）性的対象とするか、どのように親密な関係を結ぶかなどの性欲・愛情に関する事柄、それに伴い、誰とどのような性行為を欲し行うのか、その際に派生する性暴力をどう捉えるか、さらにそのようなことのある社会の中で子どもをどう教育するか、というような性行動に関する事柄、売買春、ポルノグラフィに代表されるような性の商品化に関する事柄などが、これまでの社会学におけるセクシュアリティ研究で探求されてきた。

社会学におけるセクシュアリティ研究は、1970年代後半から日本の現代思想上で大きな影響をもつようになったフーコーの『性の歴史１　知への意志』によるセクシュアリティに関する言説の探求に影響されて、それまでセクソロジーという動物学的なレベルにおける人間の性行動を自然科学の方法で研究する一分野によって担われてきた事柄が、人文社会科学によって多く担われるようになったことで、大きく前進した。セクソロジーと平行して研究されてきた、セクシュアリティを発達として捉えるフロイトを始めとする性心理学も、批判や検討の対象となった。セクシュアリティは、「自然」や「本能」として扱われるべきでなく、「社会」や「歴史」に属するものとして探求されるようになったのである。ジェンダーとともに、その社会的な「構築性」に焦点が合わされるようになったのだ。それによって、「性的倒錯＝異常」／「結婚した夫婦が生殖のために行う性行為＝正常」という二分法を解体する方向へと、歩みを進めたのである。

セクシュアリティという概念は、徐々に社会一般に広まってきており、後述するセクシュアル・マイノリティのコミュニティでは、「あなたのセク（シュアリティ）は何ですか？という問いに、「トラ（ンスジェンダー）です」という答え方がなされるようになっている（p.450「性同一障害」参照）。これまでのセクシュアリティ研究では捉えられていなかった、セクシュアリティ概念の使用法がみられるようになってきているのである。自分を女や男やどちらでもないものだと捉えるという性自認は、「性愛」やそれをめぐる観念でも行動でも社会制度でもないからである。「セクシュアリティ」概念自体を、また「セクシュアリティ」概念が指し示す射程を、再び検討する時期がきているといえる。

●「セクシュアリティの社会学」の潮流　これまでの社会学において、「セクシュアリティの社会学」だとされるもの／され得るものは、理論的な著作を除くと、３つの潮流に分けられるように思われる。１つは、フェミニズム、特に1960年代の第二派〔ママ〕フェミニズムにおいて、性愛に関する事柄について議論が沸き起こったことを引き継ぐような研究群である（p.414「フェミニズム」参照）。例えば、性暴力、売買春、ポルノグラフィに関する研究、リプロダクティブ・ヘルス／ライツに関する研究が挙げられる。もう１つは、セクシュアルな事柄の成り立ち・変遷を問うために、書籍、雑誌記事などの系統だった歴史資料を収集し、それを言説分析によって分析する歴史社会学的研究である。

最後の１つは、セクシュアル・マイノリティ研究である。セクシュアル・マイノリティは、LGBTI、LGBTQなどと略称される。Lはレズビアン、Gはゲイ、Bはバイセクシュアル、Tはトランスジェンダー、Iはインターセックス、Qはクエスチョニング（何者かまだ決めていない／決めない人）を指す。これらの研究は、日本でも1990年代に盛んになったゲイ・ゲイスタディーズ〔ママ〕、それとともに進められているレズビアン・スタディーズに加え、女装研究、トランスジェンダー研究、トランスジェダーを医学的に定義した「性同一性障害」の研究、さらにそれらがクイア・スタディーズ（p.452「クイア」参照）として、コミュニティの運動とも連動しながら展開されている。ただし、フェミニズムを継承する研究でも、セクシュアル・マイノリティ研究でも、歴史社会学的なアプローチをするものも存在するし、歴史社会学的研究、セクシュアル・マイノリティ研究にフェミニズムが与えた／与えている影響は、多大である。［鶴田幸恵］

《参考文献》

フーコー、M.／渡辺守章訳、1986,『性の歴史１　知への意志』新潮社

「性」や「sex」は、「男女の性差」と「性愛」を指示している。セクシュアリティは、分析概念であり、セックス（生物学的性別）やジェンダー（社会的性別）に還元されないもので、性愛をめぐる欲望や感覚と結びついている、とされている。「性愛」概念が導入されており、セクシュアリティが分析概念となっているが、セクシュアリティの社会学研究の対象は、あいまいとなっている。フーコーのセクシュアリティに関する言説の探求に影響され、セクシュアリティは、「自然」や「本能」ではなく、「社会」「歴史」に属するものとして探求されている。社会的な「構築性」に焦点化され、「異常」／「正常」の二分法が解体されている。性自認ではない「セクシュアリティ」概念自体の使用法が検討されている。「セクシュアリティの社会学」の潮流として、第二波フェミニズムの研究群、言説分析の歴史社会学的研究、セクシュアル・マイノリティ研究の３つの潮流があることが指摘されているのである。

見田宗介編集顧問『現代社会学事典』弘文堂 2012

セクシュアリティ　[英] sexuality

有性や男女の生物学的性差を表すsexの形容詞形sexualが名詞化したもの。オックスフォード英語辞典によれば初出は1797年。19世紀以降、英語圏で広く使われるようになった概念である。その主要な意味としては、⑴性的であること、性をもつことの性質（反対語は無性asexuality）、⑵性的な性質・本能・感情、⑶人が典型的に魅了されるジェンダーに関連する性的アイデンティティ、異性愛・同性愛・両性愛であるという事実、性的指向などがある。これらの辞書的定義をみるだけでも、セクシュアリティには、性的差異（男女の区別）の次元、性的欲望（性欲）の次元、性的アイデンティティの次元が存在しており、多義的な概念といえる。

もっとも現在ではセクシュアリティは、とりわけアイデンティティとの関連で論じられることが多い。たとえば、遺伝子－解剖学的レヴェル、生殖機能上の差異（生物学的性器の差異）を基準としたアイデンティティを「セックス・アイデンティティ」、「女」／「男」への日常感覚に伴う社会－文化的な意味や期待のなかにカテゴライズされた「ジェンダー・アイデンティティ」、性の活動や性行為に結びつく性への指向（嗜好）に表現される「セクシュアル・アイデンティティ」などの３分類がよく知られている。さしあたりセックスやジェンダーは、「差異」を構成要素にした概念だが、セクシュアリティは「差異」を基盤としつつ「欲望」を構成要素とする概念といえる。

セクシュアリティは通常、性的欲望や性的指向の問題として了解されることが多い。異性愛、同性愛、両性愛などの区別は、男（女）の性別を有する主体が、性行為のパートナー、あるいは性的欲望の対象となる人の性別との組み合わせに応じて分節化したものである。そのなかでも異性愛、とりわけ婚姻関係にある異性愛には、社会的に極大の正当性が付与され、逆に同性愛（ゲイ／レズビアン）や両性愛は、キリスト教文化圏では生殖につながらぬ性として否定され、近代初期には病理学的な逸脱とされた。現在でもしばしば社会的な差別の対象と成る。このような性的指向にもとづく差別や不平等を異性愛主義heterosexismと呼ぶ。

セクシュアリティを扱ってきた社会学の伝統としては、フロイト. S の精神分析の成果を取り入れ、家族の機能を性的欲求の充足に求めたパーソンズ. T らの機能主義、親族関係のシステムを女性の交換ととらえたレヴィ＝ストロース. C. の構造主義、資本主義に適合的な家族形態や性の商品化が進展すると考えたマルクス主義、家族内の子育て（母親業）によりジェンダー間の分業が形成されるとしたチョドロウ. N. 、社会が異性愛を強制すると考えるリッチ. A. 、性暴力やポルノグラフィによって女性は男性から性的に搾取・支配されると考えるマキノン. C. らのフェミニズムなどがある。もっともセクシュアリティには親族・家族のシステム、資本主義、性支配に還元されない独自のダイナミズムがある。たとえばギャノン. J. とサイモン. W. は、相互行為論の観点から、子どもが成長の過程で、どのような感情や欲望を性的と定義し、どのように振る舞うのが適切かを社会的なスクリプトを通して学習するという理論を創出した。プラマー. K. も、それぞれの文化には誰と性交するかの「性交相手の制限」と、いつ、どこで、どのように性交すべきかの「性交方法の制限」があるとする。さらにウィークス. J. は、セクシュアリティはいかにして社会的に編成されるのかを研究する際に、⑴親族・家族のシステム、⑵性関係を左右する経済力、階層分化、産業化、都市化などの経済的・社会的組織、⑶宗教、国家、社会集団などによる社会的規制、⑷性をめぐる保守派とリベラル派などの政治的対立、⑸産児制限に関する女性文化、性的少数派の下位文化など「抵抗の文化」という５つの領域に着目する必要があると述べた。セクシュアリティを構成する社会学的変数を強調するところに、セクシュアリティの社会学の特徴がある。

このような考え方は、従来のセクシュアリティに対する固定観念に対する鋭い挑戦となっている。というのも現代では、誰と性的行為を行うか、誰に性的欲望を感じるかという性的指向が、生得的・遺伝的に決定されたものか、あるいは獲得的・社会的に学習されたものであるかについて、激烈な論争があるからである。前者のような立場を「本質主義」、後者のような立場を「構築主義」と呼ぶ。ウィークスによれば、本質主義は、性や男女の差異を、遺伝子、本能、ホルモン、無意識の力動と神秘的な働きと

いった内的推進力の自律的な産物として説明する。たとえば「生物学的にみて女は、男より知能的に劣る」「女性には生まれつき母性本能がある」「同性愛になるのは生まれつきである」などの言説は本質主義的な思考の産物といってよい。

これに対して反・本質主義としての構築主義は、男女の差異や性的欲望が、遺伝的・生物学的に決定されているのではなく、社会的・文化的・歴史的に構成されるものであり、教育や制度によって変更可能であると考える。この水準での「本質主義／構築主義」をめぐる論争は、19世紀の「氏か育ちかnature or nurture」論争以来の構図をひきづる科学的論争であると同時に、女性や同性愛者に対する社会的差別を解消するための政治的・実践的な含意を強く帯びていた。たとえば性科学者マネー. J. による半陰陽者の研究は、生物学的には男性でも、幼少から女性として育てれば、女性としてのアイデンティティをもつようになると主張した。いくつかの事例では、生得的なセックスよりも、獲得的なジェンダーの方が自己の性自認に影響力を与えるように思われた。しかしマネーが治療した半陰陽者のなかにも、育てのセックス〔ママ〕を拒否して、生まれのセックスを選択した人もおり、ジェンダーがセックスに必ずしも優先するとはいえなくなった。セックスかジェンダーか、という論争に決着はついていない。

しかし社会学におけるセクシュアリティ研究が、この水準での本質主義／構築主義の対立における後者に立脚し、そこにとどまり続けるなら十分とはいえない。この点に関して、フーコー. M. やバトラー. J. に学ぶ必要がある。フーコーは『性の歴史 1 知への意志』のなかで、セックスという観念こそが、セクシュアリティの装置の内部で歴史的に形成されたと述べた。すなわち17世紀以降に西洋社会に登場する犯罪学、優生学、人口学を含めた「性の科学」が、それ以前の社会における「性愛の術」の文化に拮抗する形で登場したという。各人に己の性について語る義務を課すキリスト教的な告白の制度が、合理的・客観的言説による性の客体化と結びつき、セクシュアリティの「言説への扇動」が発生した。

バトラーもまた、言説に先在するものとしてのセックスは、ジェンダーと呼ばれる文化的構築装置の作用として理解できるという視点を提供した。セックスは自然で文化や言説に先立つという観念こそ、社会のなかで歴史的に構築される「知」、すなわち言説というわけである。このように性的差異や性的欲望に与えられる意味や観念を言説としてとらえ、言説と社会の関係を解析するのが、セクシュアリティの社会学に与えられた固有の課題である。このような視角のもとで「性差や性欲は生得的、だから変えられない／性差や性欲は社会的に構築される、だから変えられる」という前提そのものが問い直される。

むろんフーコーやバトラーが、あらゆる性差や性的欲望が社会的・歴史的な構築にすぎないとまで主張した証拠はない。むしろ知や権力からの解放の拠点として「身体」を想定していたふしがある。遺伝子、染色体、性線、性器、身体的特徴など種々のレベルで男女には差異はあるし（極論すれば、性に対する観念がどうであれ、女性だけが子どもを産めるという事実までが否定されるわけではない）、性的欲望の発現にも一定の生物学的根拠はある。しかしそれを認めてもなお、性的差異や生殖にまつわる動機の語彙を提供し、性的な欲望や関係性にさまざまな社会的規制を行い、性に関する規範や倫理を構築するのは、社会である。

むろん時代により地域により、性的関係や欲望のあり方は多様である。しかし西洋社会においては⑴誰と性行為を行うかよりも、いかに行うか（能動的か受働的か）を重視する古代ギリシャの性文化、⑵生殖につながらない性行為を罪悪視する中世キリスト教の性文化、⑶セックスを正常／異常という枠組みで科学化・医療化する近代の性科学に着目する必要がある。とりわけ19世紀から20世紀にかけてクラフト＝エビング. R. vonやエリス. H. らの性科学は、「性欲は本能であり、異性愛的である」という考え方を普及させ、夫婦関係につながらないセクシュアリティを医学的な病として逸脱視した。しかし20世紀に入るとフロイト. S. の精神分析、キンゼイ. A. の影響下で、「性欲は自然なものであり、人間のアイデンティティにとって中核的なものである」とする考え方が優勢となる。そして精神分析やセラピー文化の影響により、性的なアイデンティティが個人の人生にとって特権的に重視されるようになった。フーコーがとらえようとしたのは、この局面である。またギデンズ. A. は後期近代においては、生殖という必要性から解放された「自由に塑型できるセクシュアリティ」が出現し、性的にも感情的にも対等な「純粋な関係性」が一般化していくとする。

なおセクシュアリティという概念が、近代の西洋社会以外に適用可能であるかについては、現在でも論争がある。極端な構築主義の立場をとるならば、セクシュアリティという概念が登場する以前には、セクシュアリティは存在しなかったとさえいいうる。ただし西洋出自のセクシュアリティはグローバリゼーションの過程で非西洋社会にも輸出され、ある程度、共通の枠組みで語ることができる。たとえば齋藤光によれば、私たちが現在、「性」という内容で理解している事柄は、かつては「色」や「淫・婬」によって編成されていた。15世紀くらいまでには「淫欲」「色情」が性的な事柄を指し示す記号・概念として現れ、近代以降、とくに明治期前半に「獣欲」「肉欲」が出現する。そして1880年代に「性欲」という概念が登場し、これが広く浸透するに至る。少なくとも近代以降については、西洋社会のセクシュアリティ概念に即した形で日本の性の歴史を語ることは可能である。他方、その社会の歴史や民俗に土着の性文化が、西洋出自のセクシュアリティといかに融合したり、反発しあったりするかを解析することが、セクシュアリティを歴史的に考察する際には重要な課題となる。

またセクシュアリティに関する事柄は、妊娠中絶や売買春、同性婚の是非などの倫理的問題、性表現に関する禁止・規制の問題、子どもや高齢者、障害者など社会的弱者の性など、さまざまな形で社会問題化され、しばしば激しい論争となる。この際に、いかなる性の倫理を構想しうるかが現代の我々に問われている。

◎赤川　学

⇨アイデンティティ、逸脱、ウィークス、家族、ギデンズ、機能主義、強制的異性愛、キンゼイ、キンゼイ報告、ゲイ・スタディーズ、交換、構造主義、構築主義、告白、差異、差別、ジェンダー、人工妊娠中絶、親族、身体、性愛、性教育、性行為、

性自認、生殖、精神分析、性的指向、性の科学（セクソロジー）、性の商品化、性別役割分業、性暴力、性欲、同性愛／異性愛／両性愛、同性婚、売買春、パーソンズ、フェミニズム、フーコー、プラマー、フロイト. S. 、ポルノグラフィ、本質主義、マルクス主義、欲望、両性具有、レヴィ＝ストロース、レズビアン・スタディーズ

《主要文献》Foucault, Michel, *Histoire de la Sexualite: La Volonte du Savoir*, Gallomard, 1976（フーコー著／渡辺守章訳『知への意志』性の歴史１, 新潮社, 1986）. Weeks, Jeffrey, *Sexuality*, Routledge, 1986（ウィークス著／上野千鶴子監訳『セクシュアリティ』河出書房新社, 1996）.）Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, 1990（バトラー著／竹村和子訳『ジェンダー・トラブルーフェミニズとアイデンティティの攪乱』青土社, 1999）. 齋藤光「「性欲」の文化的標準化」『京都精華大学研究紀要』第 6 号, pp. 161-176, 1994. Gagnon, John, William Simon, *Sexual Conduct: The Social Sources of Human Sexuality*, Aldine, 1973. Plummer, Kenneth, *Telling Sexual Stories: Power, Change, and Social Worlds*, Routledge, 1995（プラマー著／櫻井厚ほか訳『セクシュアル・ストーリーの時代』新曜社, 1998）. カーケンダール著／波多野義郎・黒田芳夫訳編『愛の理解－家族関係の性教育』ぎょうせい, 1975. Giddens, Anthony, *The Transformation of Intimacy*, Polity, 1992（ギデンズ著／松尾精文ほか訳『親密性の変容』而立書房, 1995）. Colapinto, John, *As Nature Made Him: The Boy Who Was Raised as a Girl*, Harper Perennial, 2000（コラピント著／村井智之訳『ブレンダと呼ばれた少年』扶桑社, 2005）.

Sexualityはsexの形容詞形sexualが名詞化したもので、19世紀以降に英語圏で広く使われるようになり、「性的なこと」「ジェンダー・アイデンティティ」「性的指向」の意味があり、男女の性差・性的欲望・アイデンティティの次元がある多義的な概念とされている。アイデンティティには「セックス・アイデンティティ」「ジェンダー・アイデンティティ」「セクシュアル・アイデンティティ」などに３分類され、セクシュアリティは「欲望」を構成要素とする概念として、「性的欲望」「性的指向」の問題と了解されている。近代には異性愛主義（heterosexism）に基づく差別や不平等がある。社会学ではセクシュアリティには、親族・家族システム／資本主義／ジェンダー支配に還元されない独自のダイナミズムがあるとされている。セクシュアリティを構成する社会学的変数が強調されているのだ。

性的指向の「本質主義」「構築主義」の論争は、社会的差別に対する政治的・実践的含意が伴っている。社会学は後者に立脚するが、そこに留まり続けているわけではない。「セックスという観念がセクシュアリティの装置の内部で歴史的に形成された」と述べたフーコーの『性の歴史』の言説分析や、「セックスは、ジェンダーと呼ばれる文化構築装置の作用として理解する」視点を提供したバトラーに学んで、「セックスの自然観念が社会の中で歴史的に構築される」とする言説と社会の関係を解析するのが、セクシュアリティの社会学の課題なのである。後期近代では生殖の必要性から解放された「セクシュアリティ」が出現したとされている。この「セクシュアリティ」概念は、近代の西洋社会以外にも適用可能であるのだろうか。この西洋出自の「セクシュアリティ」概念は、グローバリゼーションの過程で非西洋社会にも輸出されている事実はある。この「セクシュアリティ」概念と、非西洋社会の「概念」の関係（融合・反発）を解析するのが、セクシュアリティの歴史社会学の重要な課題となっている。さらに、「性の倫理」の構想が現代の我々に問われていると指摘されている。

６．終わりに

「性」概念を有する日本語において「セックス（sex）概念と異なる「セクシュアリティ」概念は必要なのだろうかという問いを持って、「セクシュアリティ」概念を検討してきた。「セクシュアリティ」概念は、まだ日本語の語彙の中に市民権を得たわけでもなく、「セクシュアリティ」は、sex「性」「性的」の延長的なものとしての理解に留まっているのが現状ではないだろうか。そのような理解の中で、「性自認」「性的指向」の問題として「同性愛」概念が登場してきており、同性愛をホモセクシュア

リティという「セクシュアリティ」の問題としてではなく、「性」(＝性欲、恋愛)を前提とした「性愛」の問題と理解している現状があるのではないか。この「性愛」は、未定義概念であり、あいまいであり、「愛」の問題に還元されて、理解されてしまう傾向が大と思われる。他方で、「セクシュアリティ」概念は、セックスの「人間化」の意味で使用されつつある傾向もあり、近代社会の「性」の人格化の傾向に見合って、「性欲」「性愛」の人間化に貢献している側面は見逃せないだろう。

こうした中で、専門用語としての「セクシュアリティ＝sexuality」概念の日本語への導入が、70年代から続いている。明らかに英語圏におけるsexuality概念の使用法の紹介をベースに、英語圏におけるsexuality概念の周辺語彙であるsex、genderとの差異関係を中心に、sex/gender identity/sexual orientationをキーワードにしたsexualityの模索が紹介されてきたのである。

人文社会科学の問題としてsexualityは、70年代のフーコー以降、パラダイムが変わり、sexの「自然化」の解明をする言説分析が中心となり、「セクシュアリティの近代の装置」の発見がもたらされた。そこには70年代以降のフェミニズム研究や社会構築主義の思想の成果が入ってきて、権力論として男性中心のヘテロセクシュアリティ(heterosexism)の解明が進展している。

社会学ではこれらの流れを受けて、分析概念としてセクシュアリティ概念の精緻化が進んでいるが、言説分析においては、分析概念に還元されない「セクシュアリティ」概念が問題提起されている。さらには、西洋社会発のsexuality概念と連動し始めた日本語「セクシュアリティ」概念の動向が注視されているのである。日本語に「セクシュアリティ」概念が必要かどうかは、日本社会の言説の動向如何の問題となり、日本語使用者の用法の実践課題と共に共在しているのである。

参考辞典

現代性科学教育事典編纂委員会『現代性科学教育事典』小学館1995
木田元他編『コンサイス20世紀思想事典(第２版)』三省堂1997
廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』岩波書店1998
リサ・タトル(渡辺和子監訳)『新版フェミニズム事典』明石書店1998(旧版1991)
マギー・ハム(木本喜美子・高橋準監訳)『フェミニズム理論辞典』明石書店1999
ソニア・アンダマール／テリー・ロヴェル／キャロル・ウォルコウィッツ(奥田暁子・樫村愛子・小松加代子訳)『現代フェミニズム思想辞典』明石書店2000
井上輝子他編『岩波　女性学事典』岩波書店2002
日本社会学会社会学事典刊行委員会[編]『社会学事典』丸善株式会社2010
見田宗介編集顧問『現代社会学事典』弘文堂2012
日本大百科全書(ニッポニカ)小学館(1984-1994)デジタル版2001, コトバンク2014

参考文献

ジェフリー・ウィークス(上野千鶴子監訳)『セクシュアリティ』河出書房新社1996
ジェフリー・ウィークス(赤川学訳)『われら勝ち得し世界ーセクシュアリティの歴史と親密性の倫理』弘文堂2015
アンソニー・ギデンズ(松尾精文ほか訳)『親密性の変容』而立書房1995
ジュディス・バトラー(竹村和子訳)『ジェンダー・トラブル：フェミニズとアイデンティティの攪乱』青土社1999

ミシェル・フーコー(渡辺守章訳)『性の歴史Ⅰ　知への意志』新潮社1986
赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房1999
上野千鶴子他編『セクシュアリティの社会学』岩波講座・現代社会学10, 岩波書店1996
上野千鶴子『セクシュアリティをことばにする 上野千鶴子対談集』青土社2015
小田亮『性：一語の辞典』三省堂1996
川村邦光『セクシュアリティの近代(講談社選書メチエ)』講談社1996
川村邦光編『セクシュアリティの表象と身体(ビジュアル文化シリーズ)』臨川書店2010
田崎英明『ジェンダー／セクシュアリティ』岩波書店2000
三成美保『同性愛をめぐる歴史と法－尊厳としてのセクシュアリティ(世界人権問題叢書)』明石書店2015
関修・志田哲之編『挑発するセクシュアリティー法・社会・思想へのアプローチ』新泉社2009
好井裕明『セクシュアリティの多様性と排除 (差別と排除の〔いま〕第 6 巻)』明石書店2010
針間克己他『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援－同性愛, 性同一性障害を理解する』岩崎学術出版社2014
一般社団法人“人間と性”教育研究協議会(性教協)『季刊SEXUALITYセクシュアリティ』[雑誌]エイデル研究所, 1982-.